

掛川地区・下半田川

蛇ヶ洞川下流域にあたり、特別天然記念物のオオサンショウウオの生息地として知られています。農業を中心とした山村ですが、県境に近いことから岐阜県多治見市とのつながりが強い地区です。



オオサンショウウオ（国指定特別天然記念物）

世界最大級の両生類オオサンショウウオは、日本固有種であり国の特別天然記念物に指定されています。主に西日本に分布しており、成体の全長は1mを超えるものもあります。下半田川を流れる蛇ヶ洞川はこの分布の東限地区にあたります。オオサンショウウオは、冬眠をせず年中活動しますが、主に夜行性で日中みかけることはほとんどありません。7月頃から繁殖期に入り活動が活発化し、9月に川岸の巣穴で産卵します。産卵後の巣穴はオスの「ヌシ」が守り、40～50日後に孵化して幼生が誕生、2月から3月にかけて幼生は巣穴から川に出て巣立ちします。蛇ヶ洞川の河岸には人工巣穴が設置されており、瀬戸オオサンショウウオの会の保護活動などによって毎年産卵がみられます。

庚申堂



現在の庚申堂は、明治 10 年（1877）前後にコレラ・はしかが全国的に大流行した折、村を疫病から守ってもらうために建てられたものと伝えられています。2 間 × 2 間の側柱建物で、屋根は寄棟となっています。もともとは萱葺でしたが、平成 9 年（1997）にトタン葺きとしています。堂内には 2 枚の棟札が納められており、文政 2 年（1819）に再建されたとするものと、昭和 40 年（1965）に修理されたとするものが確認されます。現在の庚申堂の東側には、礎石らしき石材や平場もあり、江戸時代以前にも庚申堂等の建物がこの地に建っていた可能性が高いと思われます。

八剱社



下半田川村の氏神社である八剱社の創建年代は明らかではありませんが、境内最古の石燈籠は貞享 2 年（1685）造ですので、それ以前から拝殿が建てられていたようです。熱田神宮の別宮に由来し、秋葉社・愛宕神社・津島社なども合祀されています。かつては、秋の例大祭には川東・川西・青年会から 3 頭の献馬奉納がなされ、火縄銃や棒の手も出て、賑わったそうです。

蔭昌寺跡



蔭昌寺は、延徳2年(1490)に創建、開山は定光寺老師の観空公禪師で、元和8年(1622)年に外之原村(現在の春日井市)に移ったと伝えられています。現在は、寺院の堂宇は残されていませんが、下半田川の集落を見下ろす尾根上に宝篋印塔などが残っています。宝篋印塔は2基あり、紀年銘等が書かれていないため、由来については詳細不明ですが、その特徴から1400年前後の年代に作成されたものと考えられます。伝承の年代よりも遡る年代ですが、延徳2年以前からこの地が寺院等であった可能性があります。

さいのかみしゃ 妻神社



縁結び・子授けの神社として知られています。神社には、下半田川に美しい兄妹がおり、兄は妻を、妹は夫を求めて他所へと旅に出て、ようやく見つけたのが兄妹であったという悲しい伝説があり、その兄妹を祀った祠が妻神社となったという由来があります。毎年3月第3日曜日に例祭があり、多くの参拝者で賑わいます。



阿弥陀如来立像（県指定文化財 / 彫刻）

下半田川観音堂には2体の平安時代の仏像が祀られていました。昭和48年（1973）以降には観音堂右手の文化財収蔵庫に安置され今日に至ります。阿弥陀如来立像（像高98.4cm）は、体幹部はヒノキ材の一本造りで、内刳りはされていません。手の印は上品下生の「来迎印」、首は三道相、額の白毫は石製（後世の補修）、肉髻珠も石製（後世の補修）がみられます。上半身は偏衫、下半身は巻スカートのような裙を着て、それらの上に袈裟を纏います。本像は、同所の十一面観音菩薩立像と比べ、衣文表現の意匠化と形骸化が進み、体部の量感も減じていることから、やや時期が下がり、12世紀前半の作と考えられます。表面の痕跡から、当初は前面に白色下地を施し、彩色仕上げしていたと考えられます。



十一面観音菩薩立像（県指定文化財 / 彫刻）

十一面観音菩薩立像（像高 111.3 cm）は額上の宝冠は失われていますが、頭の上に 10 面の仏面、正面に化仏立像がみられます。腰をやや左に捻り、右膝をやや前に出した立像で、ヒノキの一材より彫りだし、内削りは施していません。垂下する左腕は折り返して水瓶を胸の前で執った形、右腕は全体を垂下させて掌をやや外に向け全指を軽く伸ばします。やや下膨れの穏やかな表情の顔立ちで、腹部がやや張り出すなど、奥行のある造形となっており、量感に富んでいます。一方、浅く穏やかな衣文表現を考慮すると 11 世紀後半の造像と考えられます。本来は彩色仕上げであったとみられますが、現状では彩色はほとんど剥落しています。



陶器



石器



創造



街



交流



自然



祭り

掛川小学校シデコブシ群落



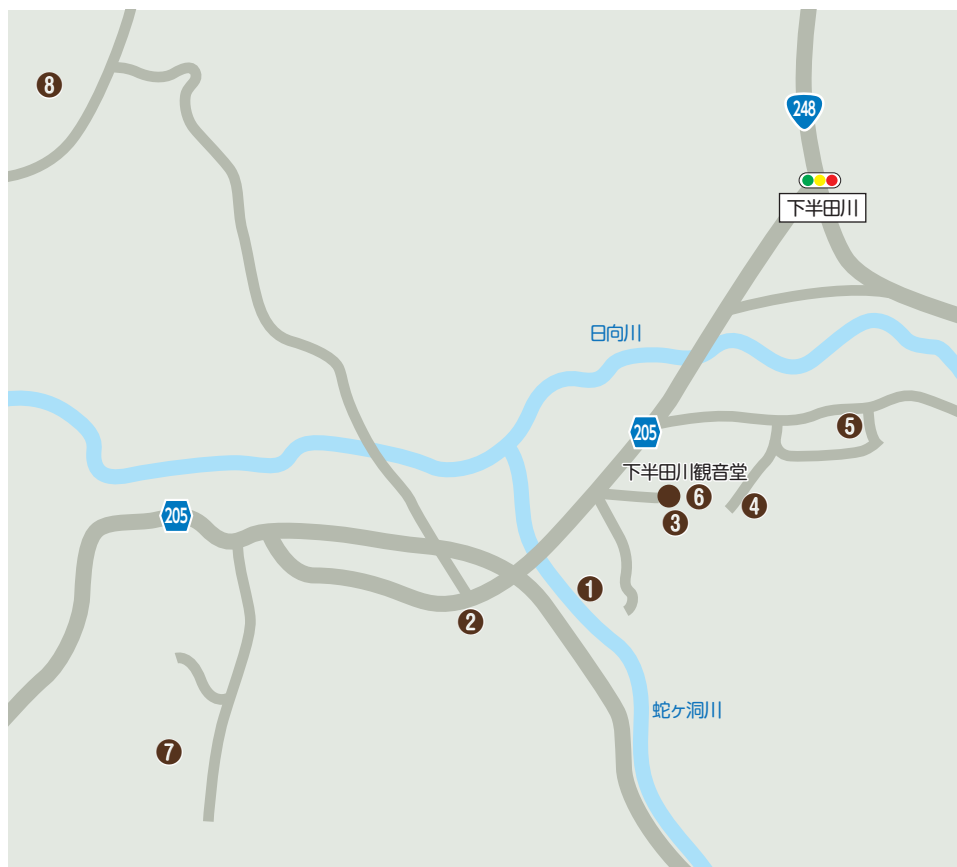
シデコブシはモクレン科モクレン属の落葉小高木で、自生の分布範囲は東海三県に限られ、現在は準絶滅危惧種に指定されています。根元から分かれ株立ち、花は早春に開葉に先立って白い花を咲かせます。花の形が四手（しで）に似たコブシのような花をつけることから、この和名となっています。

瀬戸市内では、12,000 余株の生育が確認されています。掛川小学校北側谷地の大群落は、馬ヶ城地区と並んで市内では最大級の群落となっています。比較的低木が多いのが特徴ですが、3 月に谷内のあちこちに白い花が咲く様は見事です。

尾呂窯跡



尾呂窯はその創業に関する記録が全く無いことから、戦前加藤唐九郎氏により「隠れ窯」とされ、飴釉にうのふ釉を施した「尾呂茶碗」「尾呂徳利」などが伝世品として知られています。ゴルフ場造成にともなう発掘調査により 6 基の連房式登窯が確認されています。焼成器種構成や型式上の特徴から 17 世紀第 4 四半期から 18 世紀前葉あたりにかけて操業し、その最盛期は 18 世紀初頭と考えられています。窯跡は調査終了後埋め戻され、現在はゴルフ場 9 番ホールティーグランド横の斜面に保存されています。



- ①オオサンショウウオ (P123)
- ②庚申堂 (P124)
- ③八剣社 (P124)
- ④蔭昌寺跡 (P125)
- ⑤妻神社 (P125)
- ⑥阿弥陀如来立像 (P126)、十一面観音菩薩立像 (P127)
- ⑦掛川小学校シデコブシ群落 (P128)
- ⑧尾呂窯跡 (P128)